関　弥生様からのお手紙

山田　功

2006年正月、年賀状の束と共に、1通の角封筒が届いた。裏を見ると東京の関弥生様とある。私は驚き、心臓の鼓動の早くなるのを感じながら、野菜の絵の並んだシールの封を開いた。

関弥生様と言えば、寺田寅彦先生のお嬢様である。寺田寅彦先生は私が生まれる前に亡くなられ、既に78年が経つ。つまり、歴史上の人物なのである。私が「寺田寅彦随筆集」をはじめて手にしたのは、高校生の時である。以来寺田寅彦の作品に、人柄に魅せられ、寺田寅彦に関する本は手元に置いておきたく、せっせと収集に努めてきた。つまり寺田寅彦先生は、私にとって格別の人なのである。そのお嬢様からお手紙をいただいたことは、今まで書物上での繋がりでしかなかった大人物寺田寅彦先生と突然接近した不思議な感じと、まさに体が震えるほどの感動であった。

手紙の書きだしは、『突然でございますが、私は寅彦の娘関弥生と申します。山田さんはいつも「槲」にいいものを書かれるので喜んで拝見しております。』とある。私の全く気付かないところで、関弥生様はこの会報「槲」を読んでおられたのである。恐縮のあまり、額に汗が滲んだ。今まで会報「槲」に色々書かせていただいたことの反応がこんな形で現れようとは、想像だにしなかった。ありがたいことであり、これからの大きな励みとなったことである。

この手紙が届いたきっかけは、私が中谷宇吉郎雪の科学館友の会会報「六花」に書かせていただいた、「春艸雑記にまつわる話し」を岩手県の千葉明様が関弥生様に紹介して下さったことである。ここでも私が書いたものが、こんなふうに広がったことに、とても不思議な縁を感じたのである。

関弥生様の手紙の終わりには、『新春の贈り物になるよう家事の合間に急いで書きました。』と書かれ、中谷宇吉郎が書いた日本叢書2冊が同封されていた。この2冊は、私が探し求めていた本である。表紙には「関四郎様」と書かれている。中谷宇吉郎の筆跡に違いない。つまりこの本は中谷宇吉郎が関弥生様のご主人に昔送られたものである。年末の多忙の中関弥生様は、相手の気持ちを推し量り、お年玉になるよう送って下さったのである。

それから5か月後、関弥生様は、天国へ旅立たれた。悔やみきれない出来事であった。

写真：寅彦先生の描かれた弥生様
（高知県立文学館提供）